

女子短期大学におけるスクール・モラル・テスト の作成と学級雰囲気について

——鹿児島女子短期大学児童教育学科の学生を対象として——

坪井 敏 純

一般にいわゆる集団とは、(1)人々の間に相互依存関係があり、相互作用が可能であること、(2)人々の間に共通の目標、あるいは規範(ルール)が共用されていること、の条件が必要である。そして集団が成立することにより、その成員に対して集団は情報的影響と規範的影響を与えることになる。

もともと学級集団は人為的・強制的に編成され、その編成直後の段階ではおたがいに面識もなく人間関係も成立していない。その意味で集団と呼ぶにふさわしい特徴は備えていないといえる。しかし集団生活が進むにつれて心理的集団として組織化させて行くのである(高橋, 1986)。このような学級集団の特徴を永田(1981)は次のようにまとめている。

1. 制度として強制された関係として編成されること
2. 知識・技能などにおいて、学生・生徒・児童と対等でない教授者の指導または支配が前提とされていること
3. 活動の目的が予め決められているうえ、知識、技術の習得、文化の創造的な担い手あるいは人間としての成長など構成員自身の変化がその目標であること
4. これらの目標の達成を評価する基準そのものが多面的であること

また、高橋(1986)は学級集団を「教師の計画的指導のもとに共通の学習活動を行なう子どもの集団」と定義し、上記の特徴のほかに次のような点を挙げている(柳井・浜名, 1979)。

1. 学級の編成が子どもの意志や希望とは無関係に成され、子どもに所属の自由のない閉鎖集団である。
2. 集団生活が続けられることによって集団の特徴が備わってくる。

このような学級集団が児童・生徒に果たす役割はかなり広範囲にわたるが、簡単にまとめれば次のようになるであろう(島, 1986; 高橋, 1986; 辰野, 1976; 柳井・浜名, 1979)。

1. 自己中心的行動の抑制など、社会的行動様式の獲得を促進させる。
2. さまざまな社会的欲求の充足を可能にする。
3. 学習活動への動機づけや強化に効果的な場を提供する。
4. 集団形成の過程で、地位や役割が分化し、自己あるいは他者への理解が深まり、それがひいては人格形成に大きな影響を与える。

結局学級集団とは、学習目標達成という公式的、目的集団としての特徴と、子どもの学級への適応や人格発達に大きな影響を与える心理集団としての特徴を合わせ持つ集団といえよう(高橋, 1986)。

ところで学級集団の活動が続けられるうちに、学級構成員の相互作用によって学級に醸成されてくる一定の気分が生れてくる。このような学習活動過程全般にわたる総合的・全体的な特徴を学級雰囲気(社会的風土あるいは学級風土)と呼ぶ。このような雰囲気が一度形成されると、構成員が変わらない限り比較的長続きする傾向を持っている。そして学級活動をあるいは促進し、あるいは阻害する力となって、その学級集団を一層特徴づけることになる。また学級雰囲気と同様に学級集団のもつ独自の個性を究明する試みとしてモラル(morale)の観点からみたものも多い。このスクール・モラルとは学級集団生活への意欲的な参加の姿勢と定義づけられ、集団の目標ないし課題の達成にむけての成員の自発的・積極的態度または行動と解されている。特に教育の場では、児童・生徒の適応度と学級集団全体の士気の2つの観点から、それらを相互関連的に見る必要があろう(小川・水野・倉盛, 1979)。

本研究は、短期大学におけるクラスの役割を検討することを目的として始められたものであるが、そのきっかけは本学の児童教育学科(初等教育専攻及び幼児教育学専攻が含まれる)が従来の学級担任制度からホーム制度に変わったことにある。学級担任制度は同一学年の学生を1クラス50~60人配置し、そこに一人の担任が学生の相談・援助にあたるというものであるが、ホーム制は1・2年生がそれぞれ15名程度含まれるクラスを編成し、そこに一人の担任が配置される形態をとる。根本的に異なるのは上級生と下級生が一つのクラスを形成する点である。

現在一週間に一度不定期ではあるがクラスの時間が持たれ1・2年生が接触する機会があるが、残念ながら未だ十分にその長所を生かし切っていないのが現状である。しかし上級生との接触は短大全体の活性化につながり、特に専門職をほとんどの学生が目指す児童教育学科では、同じ目標をもった上級生との関わりは下級生にとってさまざまなモデリングの機会を与えることになる。このような異学年の学生同志の接触がそれぞれの学生に如何なる影響を与えるか、あるいは短大教員と学生との関係を良好に保つ方法として如何なる形態が望ましいかを明らかにすることが研究の最終的な目標であるが、まだホーム制に移行して半年しか経っておらず、またその変化を見るための指標もないため、今回の研究はその指標作りが主要な目的である。

そこで今回の担任制度の変化にともない特に、第1にクラスの中に異なる学年の学生が含まれることで学級雰囲気が変化するであろうと予測される。第2に下級生が上級生に接触する機会が増えることで、上級生に対する印象が変化する可能性がある。第3にこれが最も重要であるが、学年間の分断が少なくなり学科あるいは専攻の活性化(士気の上昇)につながるのではないかとといった点から、本研究では学級雰囲気とモラルを、担任制度の変化に伴う学生生活上の変化を見るための一つの指標として採用し、短大に適切な内容に作り直す作業から始めることにした。

当然であるが小・中学校と短大ではクラスの役割に大きな違いがある。恐らく最も大きな違いは、担任の役割であろう。短大の担任は研究者としての側面がかなり強い立場に立ち、学生自身も又そのような認識を持っている。

さらに短大の専攻によっては就職の際に専門職(例えば教員や栄養士)を目指して入学してくる学生が多いため、クラス全体の目標ではないがクラス全員が一つのかかなり具体的な目標を目指すという結束

しやすい雰囲気が作られやすい。これは日常経験していることであるが著者も含めた多くの教員が専攻間で講義中の雰囲気が異なることを指摘している。

スクール・モラルに影響を与える要因として、一般的には(1)学校・学級への所属意識あるいは仲間意識、(2)学校・学級の目標の魅力と参加意識、(3)リーダーシップ(特に教師)を挙げることができるが、大西(1967)が作成した学級適応診断検査では、(1)学校への関心、(2)級友との関係、(3)学習への意欲、(4)教師への態度、(5)テストへの適応といった5つの要因から構成されている。

また学級雰囲気に大きな影響を与える最も重要な要因として、小川・水野・倉盛(1979)は教師のリーダーシップを挙げ、ほかにクラスの集団目標や友人関係の構造の重要性も指摘している。しかし短期大学のクラスでは担任教師との接触がそれほど多くないため、小・中学校のように教師のリーダーシップがかなり重要な役割をもつ集団とは異質な集団と考えられる。

以上の点から、従来の学級雰囲気やスクール・モラルを測定する検査を参考に短大生に使用できるような検査を作成し、今回はその結果を専攻ごとに比較した。専攻の比較を行なった理由は、前述したように講義中の雰囲気がかなり異なっているのでその違いが検査に反映されるのではないかと予想されるからである。

方 法

被 験 者

女子短期大学児童教育学科初等教育学専攻1年生87名および幼児教育学専攻1年生の83名の合計170名
実施時期

1990年3月

手 続 き

＜スクール・モラルテストの作成＞

大西・松山(1967)の学級適応診断検査(SMT)を参考にして、個人の集団への適応と学級集団全体の士気の側面から短期大学の生活様式に合致するように項目を選択した。その中で内容が短大生にはあわない「テストへの不安」は取り除き、新たに本研究の目的の一つである「上級生との関係」項目を付け加え、「学校への関心」では短大と専攻の両面から項目を作成した(表1)。結局項目の分類として、「短大への態度」、「クラスへの態度」、「勉学への態度」、「上級生への態度」、「担任への態度」が選択された。

「上級生との関係」項目を加えたのは、成長へのモデルとしての役割を上級生は持っており、上級生への肯定的な見方は学習に対する具体的な目標を得ることができるという点で重要である。加えてクラスを越えた専攻あるいは短大全体に対する評価につながる可能性を持っている。従って学習意欲との関係及び短大に対する態度と関係すると予測されるため調査項目に加えた。

「学校への関心」では、短大・大学では大学そのものへの関心と研究に対する関心とに分けて考えたほうが良いと思われる。特に「望む短大ではなかったが、専攻は希望するところであった」というようなケースでは短大生活への適応は、はたして如何なるものなのか検討しておく価値がある。

表1 スクール・モーラル検査の原案質問項目

項	目	平均	S D	P
短大への態度	自分の短大がほめられるとうれしい	4.4	.9	※
	この短大でなくても、とにかく短大に進学できてよかったと思う	3.2	1.3	
	できることなら短大をやめたいと思う	1.7	1.1	※
	この短大では、勉強したくない	1.8	1.0	※
	いま所属している、同じ学年の専攻の雰囲気は良いと思う	3.4	1.2	※
	この短大の雰囲気は好きだ	2.7	1.2	※
	できることなら、専攻を変わりたい	2.0	1.4	※
	短大の悪口を言われても何ともない	1.6	.9	※
クラスへの態度	私のクラスは、まとまりがない	2.4	1.1	※
	クラスの人と一緒に活動することは楽しい	4.2	.9	※
	他のクラスのほうが楽しそう	2.1	1.2	※
	私はこのクラスの人から好かれている	2.9	.6	
	私はこのクラスでのけ者にされているような気がする	1.6	.9	※
	このクラスに入ってよかった	4.1	1.1	※
	卒業してもこのクラスの人々とつきあいたい	4.1	1.0	※
	自分のクラスには、個人的な相談ができる人はいない	1.8	1.1	※
勉強への態度	もっと勉強して、たくさんの知識や技術を得たい	4.6	.8	※
	興味の持てない、つまらない講義が多い	2.9	1.1	
	講義内容は、自分の将来に役立つと思う	3.8	1.0	※
	勉強したい内容とはかけ離れた講義が多い	2.5	1.1	※
	もっと努力すれば、成績は上がると思う	4.5	.7	※
	勉強しても、皆についていけないような気がした	2.2	1.3	※
	自分ではよく勉強していると思う	1.8	.9	※
	出席を取らない講義は、よくさぼった	2.5	1.4	※
上級生への態度	短大の勉強のことで、先輩に教えて欲しいと思ったことはあまりない	1.7	1.0	※
	同じ専攻の先輩との交流がもっとあったほうが良い	3.8	1.1	※
	自分も、そのようになりたいと思うような、先輩がいる	3.3	1.4	
	個人的な相談を先輩にしようとは思わない	2.7	1.4	
	他の人とくらべて、私は先輩とよく話をするほうだ	2.6	1.4	※
	同じ専攻の先輩には、親しみを感ぜない	2.4	1.2	※
	先輩のなかには、勉強が足らないと思える人が多い	3.1	.8	
	ゼミのように、上級生と一緒に講義があればいい	2.6	1.4	※
担任への態度	クラス担任ともっと話す機会があればよい	3.9	1.0	※
	担任には親しみを感ぜない	2.6	1.2	※
	担任は一部の生徒をひいきしている	2.0	1.1	※
	担任の先生は、いろいろと相談にのってくれる	2.8	1.1	
	クラスの催し（コンパなど）や活動はクラス担任と一緒にしたい	3.1	1.3	
	担任制度は必要ない	2.4	1.1	※
	今のクラス担任で良かったと思う	3.6	1.1	※
	別の先生がクラス担任だとよいと思う	2.6	1.2	※

得点は、その質問について「そうおう」が5点、「ややそうおうが」が4点、「分らない」が3点、「ややそうおもわない」が2点、「そうおもわない」が1点としと換算した。Pの※は5%の危険率で区間推定の結果、回答が質問に否定あるいは肯定に有意に傾いた結果を示している。

＜学級雰囲気の測定＞

根本（1983）に従ってSD法を用いた。佐藤（1971, 1976）の研究もあるが、短大の生活に合わない項目や抽象性にやや欠けるといった点で採用しなかった。ただ、根本の分析は小学生を対象としており女子の短大生では異なる因子が抽出される可能性があるため、彼の用いた項目を再度因子分析してスクール・モラルとの関係を見た。用いた項目は付表1に示した。

＜その他の検査項目＞

学級の雰囲気やスクールモラルに影響を与える要因として共通するものは、(1) 教師のリーダー・シップ、(2) 学級の凝集性あるいは構造、(3) 集団の目標、(4) クラスへの帰属意識を上げることができる。

今回は(3)と(4)を取り上げた(付表1)。特に入学時に本学が希望の短大か、所属する専攻は望んでいたものか、さらには将来の目標(就職)と短大生活が密接に関係しているかどうかという点に関して就職に関する希望、加えて学生生活のもう一つの側面としてサークル活動への取り組みを調査した。サークル活動は短大生活を充実させる重要な要因である。上級生や同級生との親密な人間関係の形成や好きなことに打ち込み向上していく自己を実感することは、まさに生きがいを感じさせてくれるものである。

以上の検査項目は、一枚のアンケート用紙の裏と表に記載された(付表1)。検査の実施はクラスごとに分かれて行ない、学生の自己ペースで回答させた。

結果と考察

表1はスクール・モラルの全質問項目の平均値と標準偏差である。全項目を含めた因子分析の結果によって、短大への態度及び勉強への態度が因子として独立ではないことが予測されたので今回は分析から除き、さらにコミュニティの低い項目を除いて再度因子分析を行なった。結果は表2である。「上級生への態度」、「クラスへの態度」、「担任への態度」の3つの因子にまとめられた。結局最初の分析では、「短大への態度」及び「勉強への態度」は上記の3因子にそれぞれが関連し、一つの因子として取り出すことができなかった。これは逆に考えれば、短大の特徴かあるいは本学の特殊性を表すものかもしれないが、再度項目の内容を検討する必要があると思われるので、とりあえず今回の分析には外すことにした。なお以後の分析では各項目の得点を合計したものをその因子の得点として用いた。

学級雰囲気のイメージ項目については、コミュニティの低い3項目を除き、再度因子分析を行なった。結果は表3である。根本（1983）が抽出した4因子は見られず、「安心の因子」、「意欲の因子」、「人間関係の因子」の3因子が抽出された。「安心の因子」はそのクラスの中での「いごごち」とも言えるものであり、「意欲の因子」は学校生活に対する取り組み方を表し、「人間関係の因子」は仲間同士のつながりを表わしているものと理解される。以後の分析では、各因子の項目の得点を合計したものを因子の得点とした。

なおスクール・モラルの因子と学級雰囲気因子のそれぞれの相関係数は表4に示した。「クラスへの態度」とクラス雰囲気因子のそれぞれに有為な相関がみられた($P < .1$)。しかし明らかに「クラスへの態度因子—安心の因子 ($r = .666$)」と高い相関があり、「クラスへの態度—意欲の因子 ($r = .255$)」の相関係数とは有為差がある($t = 6.66$, $df = 167$, $P < .01$)。また「クラスへの態度—安心の因子」

表2 検査項目の因子負荷量及びテスト得点との相関

項 目	1	2	3	r	R
短大の勉強のことで、先輩に教えて欲しいと思ったことはあまりない	.935	— .276	.276	.50	※
同じ専攻の先輩との交流がもっとあったほうが良い	.865	.498	— .056	.50	
自分も、そのようになりたいと思うような、先輩がいる	.984	— .046	— .167	.72	
個人的な相談を先輩にしようとは思わない	.979	— .039	.198	.70	※
他の人とくらべて、私は先輩とよく話をするほうだ	.968	— .244	— .057	.63	
同じ専攻の先輩には、親しみを感じない	.965	.258	— .001	.65	※
私のクラスは、まとまりがない	— .234	.911	.338	.61	※
クラスの人と一緒に活動することは楽しい	.307	.939	— .148	.72	
他のクラスのほうが楽しそうだ	— .168	.899	.402	.63	※
私はこのクラスでのけ者にされているような気がする	— .150	.983	.104	.52	※
このクラスに入ってよかった	.127	.987	.095	.67	
卒業してもこのクラスのみなとつきあいたい	.487	.830	— .275	.74	
クラス担任ともっと話す機会があればよい	.799	.163	.579	.60	
担任には親しみを感じない	.151	— .001	.988	.70	※
担任は一部の生徒をひいきしている	— .355	.350	.866	.44	※
担任の先生は、いろいろと相談にのってくれる	.123	.117	.985	.71	
クラスの催し（コンパなど）や活動はクラス担任と一緒にしたい	.749	.400	.527	.61	
別の先生がクラス担任だとよいと思う	.219	— .044	.974	.71	※
固 有 値	2.246	2.244	1.834		
寄 与 率	16.25	26.26	35.14		

注：Rのセルの※は得点を反転した項目を表わす

表3 クラス・イメージ項目の因子及び因子負荷量

因子	項 目	1	2	3
安 心	いごごちのよい	.966	— .109	— .234
	うきうきした	.941	.108	— .318
	こわくない	.847	— .409	— .336
	たいせつな	.954	— .243	— .172
	あたたかい	.874	— .401	— .273
意 欲	なごやかな	.880	— .370	— .295
	まじめな	.016	— .990	— .134
	きびきびした	.065	— .588	— .805
	やるきのある	.276	— .831	— .481
	おちつきのある	.355	— .932	— .061
人 間 関 係	しんせつな	.611	— .474	— .633
	しらけていない	.655	— .171	— .735
	すきな	.737	— .000	— .675
	まとまりのある	.551	— .162	— .818
固 有 値		3.69	1.67	1.91
	寄 与 率	38.8	47.5	51.7

表4 スクール・モラル因子と学級雰囲気因子の相関係数

	クラスへの態度	担任への態度	上級生への態度
安 心	.666	.129	.156
意 欲	.255	.136	.155
人間関係	.577	.108	.163

の相関と「クラスへの態度—人間関係の因子（ $r = .577$ ）」の相関との間に有為差が見られた（ $t = 2.11$, $df = 167$, $P < .05$ ）。もちろん「クラスへの態度因子」の質問項目の内容が「安心の因子」の内容だということもできるが、「意欲の因子」とは関連性が少ない点を考慮すると短大の勉強に対する態度とは異なった次元の可能性がある。つまりクラス全体が意欲的な雰囲気だからといって、その本人にとって居心地が良いというわけではなく、またその逆もあるわけである。また「クラスへの態度」因子に対する相関が「安心の因子」のほうが「人間関係の因子」よりも高いことは「クラスへの態度」因子がい

いわゆる「仲良し」といった意味だけを表わしているとは言えないであろう。

表5は学級の雰囲気及びスクール・モラルの因子ごとの平均得点を示したものである。それぞれの得点は区間推定の結果、「わからない」の判断よりも有意に高い ($P<.01$)。即ちクラス、先輩、担任に対してよい印象を持っているといえる。また同様の分析によって将来に対する希望についても専攻を生かした職業につきたいと強く望んでいることが分かる ($P<.01$)。

表5 全学生のスクール・モラル因子、学級雰囲気因子、及び将来の希望の得点

	クラス	担任	上級生	安心	意欲	人間関係	将来
平均	23.3	20.9	20.5	31.0	16.8	19.6	1.9
S D	4.1	4.8	4.5	5.27	2.6	4.0	1.2

スクール・モラルの表1の※印の項目の得点は、反転させて計算した。また学級雰囲気検査の項目はプラスのイメージに対して得点が高くなるように変換した。また将来の希望得点とは、「質問4」の(6)の得点を平均したものである。得点が少ないほど、専攻を生かした職業に就きたいと望んでいることを表している。

これを初等教育専攻生と幼児教育専攻生で比べると(表6、表7)、「クラスへの態度」に初等教育専攻生のほうが高い傾向が見られた ($t=1.97$, $df=168$, $.1<P<.05$)。さらにサークルへの熱意という点でも初等教育の学生が有為に高い ($t=2.67$, $df=168$, $P<.01$)。学級雰囲気の因子では「安心の因子」($t=2.09$, $df=168$, $P<.05$)と「意欲の因子」($t=2.90$, $df=168$, $P<.01$)に有意差が認められた。

表6 初等教育専攻生のスクール・モラル因子、学級雰囲気因子、サークルへの取り組み及び将来の希望の得点

	クラス	担任	上級生	安心	意欲	人間関係	将来	サークル
平均	25.0	20.9	20.5	31.8	17.4	20.1	1.9	1.4
S D	3.9	4.8	4.6	5.1	2.7	4.2	1.0	.5

サークルへの取り組みの得点は、「はい」を1点、「いいえ」を2点と計算した。

表7 幼児教育専攻生のスクール・モラル因子、学級雰囲気因子、サークルへの取り組み及び将来の希望の得点

	クラス	担任	上級生	安心	意欲	人間関係	将来	サークル
平均	23.7	20.9	21.1	30.2	16.2	19.2	1.9	1.6
S D	4.3	4.8	4.3	5.3	2.5	3.8	1.0	.5

以上の結果をまとめると、単純な比較は難しいが専攻によって学級の雰囲気が異なることは明らかであり、初等教育の学生が幼児教育の学生よりも積極的な学生生活を送っているのではないかと推測される。なぜこのような違いが出てくるのであろうか。一つ考えられるのは、短大入学時点で(1)入学を希望した短大であったか、(2)所属を希望した専攻であったか、といった短大への期待や帰属意識が影

響しているのではないかという仮定である。

表8は本学が第一希望の短大の学生とそうではない学生の違いを示したものである。スクール・モラルの因子には有為差はないが、学級雰囲気では「安心の因子」が逆に「いいえ」と答えた学生の方が高く、「サークル活動への意欲」も同様の結果が得られた。つまり少なくとも希望の大学ではないと答えた学生でも十分適応しているといえる。

表8 本学が第一希望の学生とほかの大学を希望した学生の各検査項目の平均

	クラス	担任	上級生	安心	意欲	人間関係	将来	サークル
本 学	24.2	20.5	21.2	30.3	16.8	19.4	1.8	1.6
他の大学	24.6	20.5	20.4	32.5	16.9	20.0	2.0	1.5

表9は所属が希望の専攻かどうかで分けたものである。「クラスへの態度」に違いが見られる ($t=1.85$, $df=168$, $P<.05$) が、学級雰囲気ではほとんど差は認められない。なお将来の希望に有意差が見られるが、希望した専攻ではない学生が将来それに関連した職業に就きたいと必ずしも望まないというのは当然であろう ($t=4.39$, $df=168$, $P<.05$)。結局、本学が第一希望の短大でなくても学生生活に問題は生じないが、希望の専攻に入学できない場合にクラスへの不適応が生じる可能性を含んでいるといえよう。

表9 現所属の専攻が第一希望の学生とほかの専攻を希望した学生の各検査項目の平均

	クラス	担任	上級生	安心	意欲	人間関係	将来	サークル
現 所 属	24.6	20.6	21.2	31.2	17.0	19.9	1.7	1.5
他の専攻	23.0	20.0	19.6	30.1	16.2	18.4	2.6	1.5

さらに専攻ごとに分析すると、専攻間の違いがかなりはっきりしてくる。

図1は専攻ごとに本学が入学を希望した短大かどうかを示したものである。「希望しない短大に入学

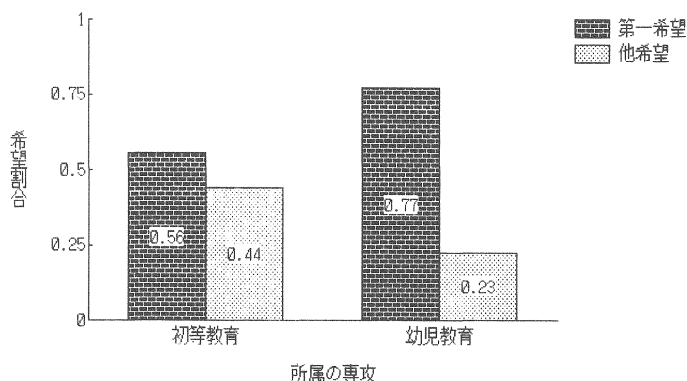


図1 専攻別の短大希望者の割合

現在所属の専攻別に、本学が第一希望の短大かどうかを調べたものである。

すると、学生生活にうまく溶け込めないのではないか」という仮説に従うならば、初等教育専攻の学生は幼児教育専攻の学生にくらべて「希望の大学ではない」と多く答えている点は（ $t=9.05$, $df=1$, $P<.01$ ）表6, 7の結果と矛盾する。しかし所属の専攻が希望した専攻かどうかについては有為な差は認められない（図2）。さらに専攻ごとにサークルに対する取り組み方を示したものが図3である。ここでも初等教育専攻の学生のほうが熱心であることが示された（ $t=6.83$, $df=1$, $P<.01$ ）。これを現在所属の専攻ごとに、本学が第一希望の大学かどうかによって分析を行なった（表10）。結果は幼児教育専攻の学生は希望の短大であれ（ $t=4.41$, $df=1$, $P<.05$ ）希望の専攻であれサークル活動には初等教育専攻生と比べて不熱心であることが明らかになった。

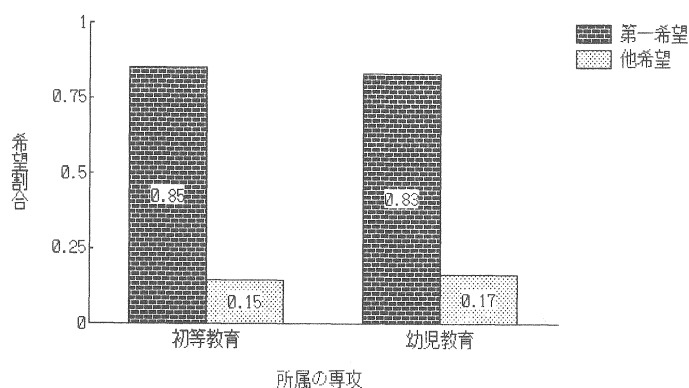


図2 専攻別の専攻希望者の割合

現在所属の専攻別に、今の専攻が第一希望のものかどうかを調べたものである。

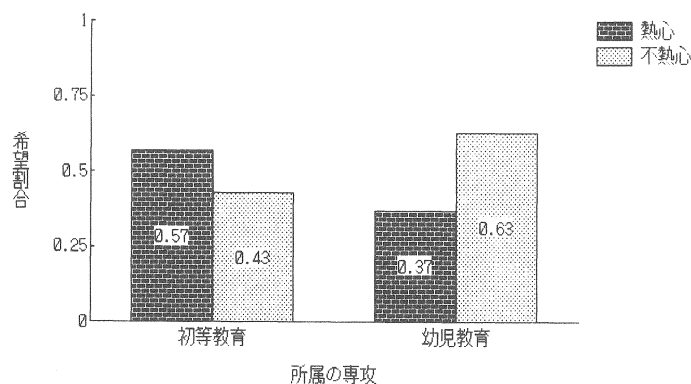


図3 サークルへの取り組み

専攻別に、サークル活動への取り組みを調べたものである。

表10 本学を第一希望に挙げた学生のサークルへの取り組み（人数）

	熱 心	不 熱 心	合 計
初 等 教 育 専 攻	27	22	49
幼 児 教 育 専 攻	23	42	65
合 計	50	64	114

結局前述の仮説は全く支持されない結果となった。つまり幼児教育専攻の学生のほうが本学の入学を希望した学生は有意に多いにもかかわらず、初等教育専攻の学生と比べて積極的な学生生活を送っているわけではないのである。

さらに希望の所属の専攻については初等専攻・幼児専攻ともほぼ同率であり、また希望の大学ではないと答えた学生は初等教育専攻生のほうが多いということは、積極的な学生生活を送るかどうかは別の要因が関与しているといえよう。考えられることは、所属の専攻で取得する資格を生かした職業に就くことを希望する程度に有意差が見られることから、勉学意欲そのものが入学時点で大きな差があるのではないかということである。残念ながら「勉強への態度」はスクール・モラル検査に入れることができなかったが、今後この点を明らかにしていくために「勉強への意欲」の因子を取り出す必要があると思われる。

結 論

スクール・モラル・テストの作成において、大西(1967)の5つの要因は抽出できなかった。特に担任教師の役割は短大の場合それほど重要な要因とは考えられない。しかし5つの要因が抽出できなかった点については、項目内容に不備があった可能性も残されているが、集団としての短大のクラスの特異性にかかわる問題ではないかと思われる。ただもう少し短大生活に重要な側面をモラル・テストに入れる必要があろう。例えばサークルや職業についての項目を含めるべきであろう。

学級雰囲気検査では、根本(1983)の4次元は抽出できなかった。しかしかなり共通した因子が見られた。「安心の因子」は共通しており、「人間関係の因子」は「凝集の因子」としてみることもできるし、「意欲の因子」は「沈黙・切迫の因子」と考えられる。問題点は「安心の因子」と「人間関係の因子」の独自性であろう。

今回は児童教育学科の初等教育専攻生と幼児教育専攻生との比較を行なったが、2つの専攻生ともかなり短大への適応度は高いと思われる。注目すべき点として、1. 本学が希望の短大でなくとも学生生活に十分適応的であるが、2. 希望の専攻でない場合にはクラスに溶け込みにくいことが示唆された。この点は入学の選考段階で第2希望の学生の取り扱いに問題を投げかけるものである、3. 短大での勉学に目的意識がはっきりしている場合、より積極的な学生生活を送っていると推測される。

引用文献

- 狩野素朗・田崎敏昭 1990 学級集団理解の社会心理学 ナカニシヤ出版
 古城和敬 1985 学級の集団過程 小川一夫(編) 学校教育の社会心理学 北大路書房
 根本橋夫 1983 学級集団の構造と学級雰囲気及びモラルとの関係 教育心理学研究, 31, 211-219
 小川一夫・水野ひとみ・倉盛一郎 1979 学級の個性 小川一夫(編) 学級経営の心理学 北大路書房
 大西佐一・他 1967 SMT 日本文化科学社
 永田良昭 1981 学級集団 藤永保(編) 新版心理学事典 平凡社

佐藤静一 1971 学級担任教師の指導型と学級雰囲気及び学級意識に関する実証的研究 日本教育心理学第13回総会発表論文集, 426-427

佐藤静一・篠原弘章 1976 学級担任教師のPM式指導類型が学級意識及び学級雰囲気に及ぼす効果—数量化理論第2類による検討— 教育心理学研究, 24, 29-40

島 久洋 1986 仲間とともに 杉原・海保(編) 事例で学ぶ教育心理学 福村出版

高橋 超 1986 学級集団の心理とその指導 森正義彦(編) 教育心理学要論 有斐閣

辰野千寿 1976 学級環境の諸問題 教育心理, 24, 234-239

柳井 修・浜名外喜男 1979 学級の出会い 小川一夫(編) 学級経営の心理学

付表1-1 心理学の調査にご協力ください (1年生)

この調査は、皆さんの短大生活をより充実させるために行なわれるものです。個人名は一切公表しませんので、ありのままの気持ちを教えてください。この調査の結果については、後日できるかぎりご報告いたします。よろしく御協力をお願いいたします。

『問1』 あなたの専攻をマルで囲んでください ---初等・幼児／生活・養護・食栄／国語・社会・司書・秘書

『問2』 次の文章を読んで、それぞれの文章の右側にある回答の中から、あなたの気持ちに一番近いものを1つ選んでその箇所に○印をつけて下さい。

(記入例)

例1. 心理学は役に立つ学問である

そ	とど	わ	そとど	そ
おう	そい	なか	わい	わう
も	う	いら	な	な
う	だ	と	い	い

では、始めてください

<質問>

1. 自分の短大がほめられるとうれしい
2. 私のクラスは、まとまりがない
3. もっと勉強して、たくさんの知識や技術を得たい
4. 短大の勉強のことで、先輩に教えて欲しいと思ったことはあまりない
5. クラス担任ともしっかり話す機会があればよい
6. この短大でなくても、とにかく短大に進学できてよかったと思う
7. クラスの人と一緒に活動することは楽しい
8. 興味の持てない、つまらない講義が多い
9. 同じ専攻の先輩との交流がもっとあったほうが良い
10. 担任には親しみを感ぜない
11. できることなら短大をやめたいと思う
12. 他のクラスのほうが楽しそう
13. 講義内容は、自分の将来に役に立つと思う
14. 自分も、そのようになりたいと思うような、先輩がいる
15. 担任は一部の生徒をひいきしている
16. この短大では、勉強したくない
17. 私はこのクラスの人から好かれている
18. 勉強したい内容とはかけ離れた講義が多い
19. 個人的な相談を先輩にしようとは思わない
20. 担任の先生は、いろいろと相談にのってくれる
21. いま所属している、同じ学年の専攻の雰囲気は良いと思う
22. 私はこのクラスでのけ者にされているような気がする
23. もっと努力すれば、成績は上がると思う
24. 同じ専攻の先輩には、親しみを感ぜない
25. クラスの催し(コンパなど)や活動はクラス担任と一緒にしたい
26. できることなら、専攻を変えたい
27. このクラスに入ってよかった
28. 勉強しても、皆についていけないような気がした
29. 他の人とくらべて、私は先輩とよく話をするほうだ
30. 担任制度は必要ない
31. この短大の雰囲気は好きだ
32. 卒業してもこのクラスの人々とつきあいたい
33. 自分ではよく勉強していると思う
34. 先輩のなかには、勉強が足りないと思える人が多い
35. 今のクラス担任で良かったと思う
36. 短大の悪口を言われても何ともない
37. 自分のクラスには、個人的な相談ができる人はいない
38. 出席を取らない講義は、よくさぼった
39. ゼミのように、上級生と一緒に講義があればいい
40. 別の先生がクラス担任だとういと思う

	そ	とど	わ	そとど	そ
1	○				
2					
3					
4					
5					
6					
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
16					
17					
18					
19					
20					
21					
22					
23					
24					
25					
26					
27					
28					
29					
30					
31					
32					
33					
34					
35					
36					
37					
38					
39					
40					

< 裏にも質問がありますので、続けて回答して下さい >

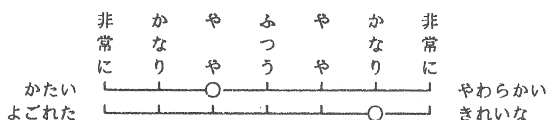
付表1-2

(/ 年生)

『問3』

この質問は、あなたのクラスの雰囲気のイメージを調べるものです。17個の形容詞が対になった質問がありますので、全てに回答してください。答えづらいものがあるかもしれませんが、あまり深く考えずに気楽に回答してください
 <例>

心理学についてどのようなイメージを持っていますか。当てはまるところに○をつけてください。



では、始めてください

(質問) あなたは、自分のクラスに対してどのようなイメージを持っていますか。



『問4』 次のそれぞれの質問について、当てはまる回答に○をつけてください。

- (1) あなたは鹿児島女子短期大学が、第一希望の大学でしたか。
はい ・ いいえ
- (2) 志望を決める段階で、現在の専攻がもっとも入りたかったところですか。
はい ・ いいえ
- (3) 入学の選考はどちらですか。
推薦選考 ・ 試験選考
- (4) 住居はどれですか。当てはまるものに○をつけてください。なお転居した場合は長期のほうを選んでください。
1年生の時： アパート(下宿・間借り・借家を含む) ・ 寮 ・ 自宅
- (5) サークル活動には積極的に参加していますか
はい ・ いいえ
- (6) 将来、短大で学んだ自分の専攻を生かした仕事につきたいと思っていますか。その希望の程度に一番近いところへ○印を付けてください
1. 強く望んでいる
2. どちらかといえば、希望している
3. 決めかねている
4. どちらかといえば、希望していない
5. 全く希望していない